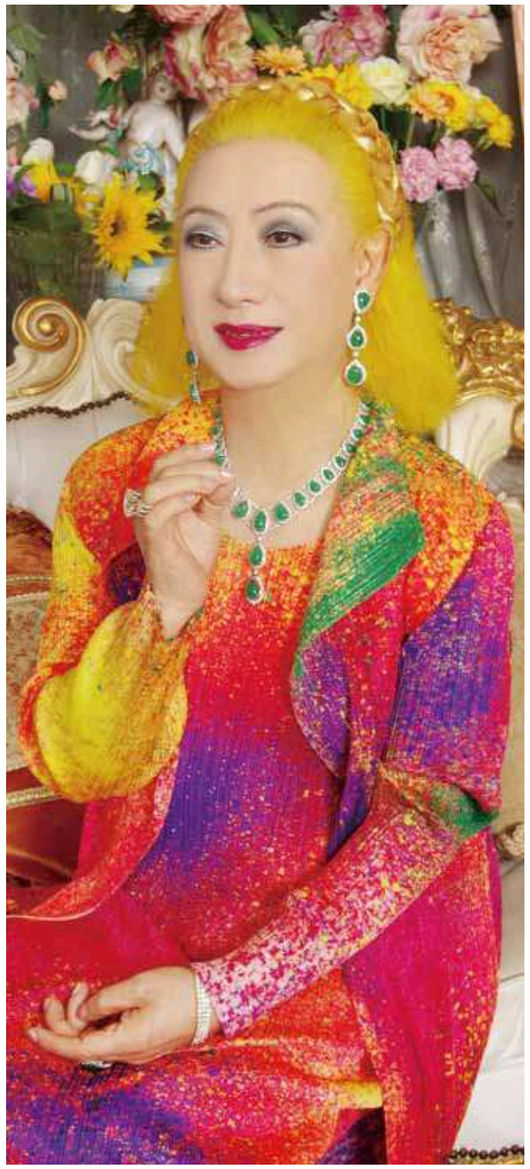
# Akihiro Miwa



世代を越えて多くの若者の心を激しくゆさぶった「ヨイトマケの唄」。従軍慰安婦の悲しみを歌った「祖国と女達」。貧しさや戦争がもたらす人間の醜さ弱さそしてやさしさを、つぶさに見てきた美輪氏だからこそ届けられる魂の叫びだ。その美輪氏が語る「霊」の世界は、人間が時空を越えて、地球、宇宙のエネルギーに生かされている存在であることを教えている。

一方の宇城氏は、今の科学では説明がつかない「気」という存在を、普遍性・再現性・客観性という形で実現するなかで目に見える形にしている。

目に見えない世界にこそ、人間の真実がある――。そう言えるのは、両氏によって明らかにされていく「霊」と「気」の世界が、一つひとつの事実をさかのぼるなかで導き出されていく世界だからだ。

目に見え、数値化できる世界だけを基準としてきたこれまでの科学や教育のあり方に一石を投じる。

取材　2013年5月20日　美輪氏　ご自宅にて
写真撮影　御堂義乗（みどうよしのり）

## 科学迷信から始まる目に見えないものへの疑心暗鬼（ぎしんあんき）

**宇城**　本日は、「目に見えない世界」をテーマにお話ができるということで、大変楽しみにしてまいりました。どうぞよろしくお願いします。

これは拙著『人間と気――人間に与えられた宇宙からのメッセージ』という本で、人間の潜在能力を引き出すために重要な、目に見えない「気」の世界について述べたものです。目に見えない世界だけに説明が難しいところがあり、自分なりに写真や図、絵でわかりやすく表現しているつもりです。この、現実に存在している「気」についてさかのぼっていくと、どうしても宇宙というテーマに行きついてしまうのですが。

**美輪**　まさに、その通りですもの。

**宇城**　一方で、「気」という目に見えない世界は、どうしても疑心暗鬼でとらえられることが多いですよね。ですから、例えば、一般常識では不可能と思われるような事を「気」によって可能にするなどの方法で「気」の存在を「目に見える形」にし、かつその内容が「普遍性、再現性、客観性」を持っていること、すなわち宇宙の法則が働いていることがよりわかるようにと、やっているところなのです。しかしなぜ人は目に見えない事に対してこうも疑い深いのでしょうかね。

舞台『黒蜥蜴（くろとかげ）』より　撮影／御堂義乗
『黒蜥蜴』は2014年に再演が決定
4月　東京公演（新国立劇場）
5～6月　地方公演

**みわあきひろ**
1935年長崎市生まれ。国立音大付属高校中退。16歳でプロ歌手としてデビュー。シャンソンを中心にタンゴ・ラテン・ジャズを歌い、銀巴里、日劇やTV、ラジオに出演。1957年「メケメケ」、1966年には自作の「ヨイトマケの唄」が大ヒット。1967年寺山修司主宰天井桟敷旗揚げ公演に参加『青森県のせむし男』に主演。1968年『黒蜥蜴』主演。1977年『双頭の鷲』で読売演劇大賞優秀賞を受賞。現在、演劇、コンサート、映画、TV、ラジオ、講演、執筆活動などさまざまな分野で幅広く活躍中。長崎での被爆体験や波乱万丈な体験からくる、人生を語る言葉は、多くの人を勇気づけている。

## 終戦後、「日本の恥と誇り」を教えていない。これが日本の最大の欠点であり損失です。

**美輪**　疑心暗鬼になるのは科学迷信から始まっているからですよ。科学でも疑似科学とかいろいろありますが、科学にしたってまだまだ開発途上じゃないですか。白髪一本だって元の黒髪に戻せないし、ハゲひとつ、ガンひとつ治せない。何にもできないのが今の科学なんですよ。

平家物語じゃないですが、「平家にあらずんば人にあらず」と同じで、科学で解明できないものは迷信であるとする。傲慢もいいところですよ。

アインシュタインにしてもエジソンにしても、みなとっても熱心な信仰家です。あれだけの科学者たちがなぜ信仰家だったのか。やはり人間というのは自分たちが計り知れない深遠なものであるということを謙虚に受け取ったからなんですね。

ですから科学者というのは傲慢を捨ててもっと謙虚にならなければいけない。最近はやけに「目に見えないもの」「スピリチュアルなもの」を危ないものとしてメディアが一斉に糾弾するような形に傾いていっています。それは例の占い師に左右されたタレント女性のことがあったからですね。メディアも知性というか沈着冷静さというのが足りないですね。

人間が完成形に近づくにはどうしたらいいかというと、生まれた時にはみな獣で動物ですが、人間という種類の動物は、犬や猫や猿と同じように動物として生まれてきても、教育されて人になっていくんですよ。人になって菩薩とか如来とか、そういった完成形に近づく。理想的な形は、悲喜こもごもの喜怒哀楽、すべての感情を全部理性でコントロールできるようになるということ。天が裂けようが地が裂けようが、いかなる天変地異が起きようが、常に冷静沈着でいられて、「結果」「原因」「途中の経緯」を一瞬にして全部筋だって見ることができ、結論をすばやく引き出して平静でいられるということ。つまり常に理性で感情をコントロールできる人間というのは、完成形に近いのではないかと思うんですよね。

ですから感情にまかせている間は獣のままで、非常に稚拙な人間だと思うんです。そういう人たちが科学というものをありがたがっているというのは、悪いけれど、わけのわからないものを崇拝して儀式をあげているような、そんな感じに思います。そう思いませんか？

### 生命体を分析する科学より悟りを体現する武術の世界を

**宇城**　すっきりしました。その通りだと思います。まさに今、科学がどれだけ事実、真実を後追いしているものであるかを、実践を通して証明している最中なのですが。技術的な分野について言えば、例えば、少し昔に流行したポロライドカメラは、シャッターを押すだけで自動的にピントが合い、その場で写真が出てくる仕組みとなっていて、当時、驚かれたものですが、この自動的にピントが合うというオートフォーカスのメカニズムの大もとは、「ホール効果」という法則を利用し、技術の力で「ホール素子」にして、それをカメラに取り込むことによってポラロイドカメラという商品を生み出しているのですね。これは新技術があってこその新商品であり、つまり技術が「活かせている」ということですね。

ところが生命体の場合は、「これこれが科学で新規に解き明かされた」と言っても、「その発見」は、すでに生命体としてはもともと存在していたものであり、新製品のようにその発見が「活かされている」わけではない。もともとすでに事実としてあるものを、しかも生命体として一つであるものを、部分分析をして切り売りしているにすぎないにもかかわらず、謙虚さを失い、いかにも生命体についてもっともらしいことを言っている後追いの科学こそ、今、人間がおかしくなっている一つの原因にもなっているのではないかと思っているのです。

昔からの武道の教えに「斬り結ぶ太刀の下こそ地獄なれ、進み行けば極楽」という言葉があります。これは、「一歩踏み込めば活路が見出される」という教えですが、しかしいくら頭でそのことがわかっていても入れない。それは心がびびってしまっているからです。つまり人間にとって身体を支配しているのは「心」であるということを教えていると思うのです。

江戸時代当時の剣聖・伊藤一刀斎や幕末の山岡鉄舟などは、「身体は内なる気に応じて動き、気は心の向かう所に応ずる」というような世界を体現していた、だからこそ、このような悟りの言葉を残したのだと思うのですね。つまり、すべての大もとはびびるか、びびらないか、その心にあるということなのですね。

ところがそういう昔からの伝統や文化を軽視し、あるいは捨て去ってしまったために、今や科学を含め人間力が低下し、「心なしの人間」が増えて、そのため心なしの政治も横行し、結果、東北の復興も遅々として進まないなど、様々な課題を引き起こしているのだと思います。かつて何事も真剣に向き合った人物を輩出した武道も、今や「勝ち負け」を競う競技武道のレベルになってしまっている。非常に情けないと思っているところです。

**美輪**　武道の「道」がとれたんですよ。「武」だけになっちゃって。それは何の行においても同じです。武士の「道」、人の「道」、芸道という「道」、柔道の「道」も、相撲道の「道」も「道」がとれてしまった。だいたい相撲部屋に竹刀などを置いておくほうがおかしいですよ。猛獣使いじゃないのですから。技術的に貧しければ、ビデオで記録しておいて、どんな原因で負けたかを冷静に分析し、どうすればいいかを何度も何度も練習させていく。そうすると技術としては負けなくなる。それが「指導」だと思うんですね。それを、ただもう、うまくいかないから、自分の言うことを聞かないからということで、がみがみ怒鳴ったりわめいたりする。それは、ただ、「お前の指導力がないだけだろう」と言いたい。

**宇城**　その通りですね。

**美輪**　知的なものが何もない。分析もできない。そういう人が学校の先生を含めて、けっこう指導者に多い。ですから、指導者としての資格を与える時に、人間性までを厳しく採点したほうがいいと思うんですよね。

**宇城**　その通りだと思います。先生というのは、「教員という資格」をもらっているだけですからね。だから常に自分自身が教育者になるための勉強をしないと、人に教えることなどできないはずなんですね。最初から「先生、先生」と呼ばれて先生という立場に甘んじてしまえば、肝心の自分が勉強しなくなる。それでは、仕組みで決められたルールを生徒たちに言葉で押し付ける、信念なき悪教育だと思うんですよね。

### 戦後失われた日本の恥と誇り

**美輪**　それはね、終戦後に「日本の恥と誇り」を教えていないからですよ。これが日本の最大の欠点であり損失です。昭和26年に締結した日米講和条約以降、アメリカの軍門に下ってすべてがアメリカナイズされてしまった。先の大戦であれだけの尊い犠牲を払って封建主義、軍国主義に変わる民主主義という素晴らしいものを手に入れた。でも手に入れたのはいいけれど、ボロクズと一緒に、宝物まで日本は捨ててしまったんですよ。

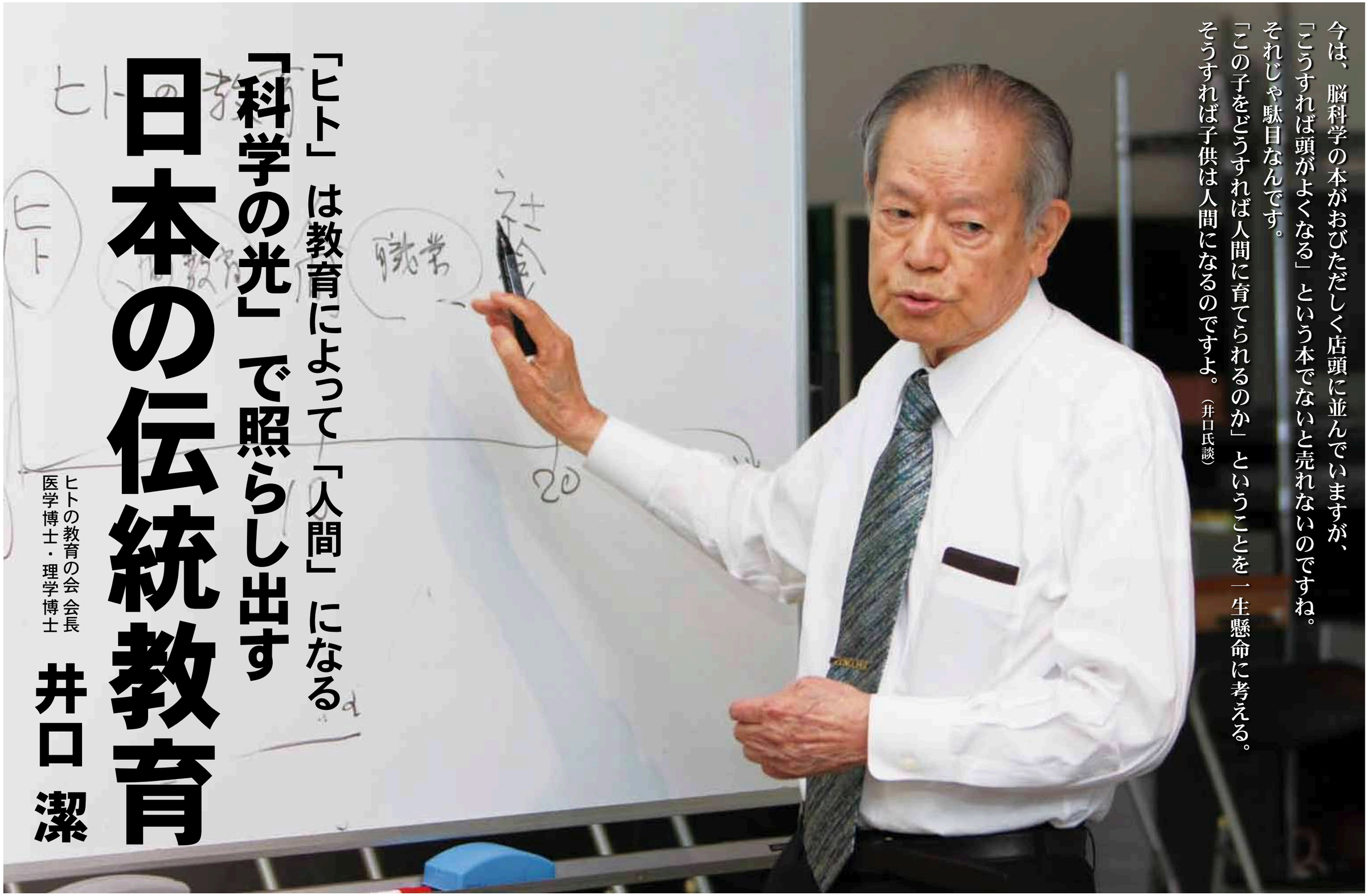
その宝物の教育をやっていたのが、修身教育なんです。物心がついた頃から、「畳の縁を踏んではいけない」とか、「お辞儀の正しい仕方」とか、日本古来の奥ゆかしい常識を日本は教えていたのですが、終戦後は、封建主義だからといって、マッカーサーの司令部から、武道も歌舞伎なども含めて一斉に禁止になり、学校の修身教育というものが全部なくなってしまった。最悪ですね。アメリカナイズされて、無能なくせに権利ばかり主張する人間が増えていったのです。

昔からいじめっこはいましたが、戦前はしかし「恥」を教えていたんですよ。というのは学校の先生も親たちも、人をいじめるというのはもっとも卑劣だ、ということを教えていたんです。いじめをする人間は、自分の強い劣等感をごまかすために、つまり上から目線になるためにやるものだ、と。人にいやがらせをしたり痛い目にあわせたりするような人間は、人間のなかで最低で一番の恥だ、ですから、「誰に指を指されてなるものか、そういう誇りをもちなさい！」ということを小さい頃から教え込んでいたんです。

ところが戦後はそうした誇りを全部なくしてしまったものだから、いじめるほうが正義で、いじめられるほうが弱くてダサいというように価値観を摩り替えてしまったんですね。またメディアも、当時はやった不良学園ものの漫画に影響されて、「不良」とか「スケバン」などがか

うしろ　けんじ

1949年宮崎県生まれ。エレクトロニクス分野の技術者、経営者として活躍する一方で武道修行を積み、文武両道の生き様と、武術の究極「気」による指導で、人々に潜在能力を気づかせる活動を展開中。「気」によって体験する不可能が可能となる体験は、目に見えないものを信じられない人にも気づきを与えるとともに、人間本来の自信と謙虚さを取り戻すきっかけとなっている。空手塾、道塾、親子塾、野球塾、企業・学校講演などで「気づく・気づかせる」指導を展開中。㈱UK実践塾 代表取締役
心道流空手道 範士八段　全剣連居合道 教士七段　宇城塾総本部道場 創心館館長
http://www.uk-ji.com/



今は、脳科学の本がおびただしく店頭に並んでいますが、
「こうすれば頭がよくなる」という本でないと売れないのですね。
それじゃ駄目なんです。
「この子をどうすれば人間に育てられるのか」ということを一生懸命に考える。
そうすれば子供は人間になるのですよ。（井口氏談）

# 「ヒト」は教育によって「人間」になる
# 「科学の光」で照らし出す
# 日本の伝統教育

ヒトの教育の会 会長
医学博士・理学博士
井口 潔

# 科学は花びら一枚だってつくることはできない。しかし、「科学の光」を伝統に当てると、人間がどう生きなければならないかという秘密を探り当てることはできる。


いのくち　きよし
医学・理学博士
１９２１年　福岡県久留米市生まれ。
旧制福岡高校・九州帝大在学中、国体射撃競技で２年連続全国優勝
九州大学教授（外科学第二講座）１９６３～１９８５年
九州大学名誉教授
日本外科学会名誉会長
日本学術会議会員（12・13・14期）
フランス・アカデミー会員
日本学術振興会井口記念人間科学振興基金運営委員
井口野間病院理事長
「ヒトの教育の会」を立ち上げ現在会長を務める。
勲二等瑞宝章


深刻な社会問題ともなっている子供の不登校や引きこもり、日本の教育はまさに崩壊の危機にある。その原因は現在の日本の「人間教育」にあるとし、その見直しと実践に邁進する井口潔氏。
江戸期の伝統教育の完成度を科学的に裏付け、日本の教育の改革・伝統教育の定着を目指す。その裏付けと、活動への思いを聞いた。

取材　２０１３年５月29日　福岡市　井口野間病院にて

## 「心の個体発生学」を確立せねばならない

――井口先生はお医者様でありながら、医者よりも、教師・親を育てなければならない、人間教育をしなければならないと活動されています。今日は、先生が提唱されている「ヒトは教育によって人間になる」ということを勉強させていただきに参りました。
なぜ、井口先生がそういう思い、活動に至られたのでしょうか。

フランス人で１９１２年にノーベル賞をとったアレキシス・カレルという外科医がいました。この人が１９３５年（昭和10年）に、『人間この未知なるもの』という本を書きました。これは18ヵ国語に訳されてベストセラーになりましたが、これを読み、私は啓発されたのです。
カレルは、人類が繁栄を保つためには「個体の保存」「種の保存」「精神の発達」という「３つの原則」があると指摘しました。「個体の保存」というのは、自分で個体を健康に保つということ。「種の保存」というのは、子供を生む、繁殖するということですね。この２つがあれば生物として〝合格〟なわけです。ところがカレルが提唱した３つ目の原則「精神の発達」ということに私はびっくりしたわけです。彼は、「ルネッサンスは人類の発達にとって素晴らしい功績であったが、ルネッサンスを引き継ぐ後輩が大きな間違いをおかした、それを改めないと人類は滅びる」と言ったのです。
どういうことかというと、「ルネッサンス以後の人間は、測定できて再現性のあるもの、すなわち知性だけが価値高いと考え、そうではない、目に見えないもの、すなわち道徳や芸術、宗教などといった感性的なものはなくてもいいと考えるようになった。これは神様が考えた「人間の精神、心の発達」からはずれ、勝手に自分の心を発達させようとしているものであり、これをこのまま反省せずに改めなければ、いずれ人類は滅びるだろう」と警告を発したのです。
昭和10年という時にですよ。ものすごく強烈な発信です。私はカレルのこの主張にものすごく衝撃を受けました。
『人間この未知なるもの』は、人間の生理を書きながら、「だから道徳（教育）はこうあらねばならない」というように、道徳を生物学的、医学的に見た著書なのですね。
私はこのカレルが指摘した人間本来の「精神の発達」とは一体何なのかを追究してみたいと思ったのです。
私が九州大学外科教授を定年で辞める頃、当時ガンの研究をしていましたから、お礼に200万くださるという製薬会社に対して、実は「人間科学」という分野をつくりたい、それには200万じゃ足らんからもう少しはずんでくれ、ともちかけたところ、別の会社の社長がその話を聞きつけて、「それは大事なことだ、皆で５０００万円出そう」と提案し、３ヵ月で一社100万、50社で集めてくれ、１９８６年に「日本学術振興会井口記念人間科学振興基金」というものができたのです。そこでこの人間科学というものの研究に取り組むことになったのです。
当初は講演会のようなものを開いていましたが、そのうちバブルがはじけて基金の利子がゼロになり、基金の展望が見えなくなりました。そこで、私はいつまで生きるかわかりませんから、５０００万円を10年かけて食いつぶすつもりで、頭を切り替えてやったのが、「心の個体発生学」なのです。
どういうことかというと、人間で言えば卵子と精子が結合してそれが成体になるまでの過程を追求する「個体発生学」という学問はあるわけですが、これは身体の個体発生学です。ところが赤ちゃんの心がどのようにして大人になっていくのかという経過を学問的に記述する「心の個体発生学」というのがないわけです。
体は放っておいても大きくなる。だから心も自然に育つだろうという思いが大間違いなのです。人間の体というのはお母さんの体内でほとんど完成して生まれてきます。ところが心は未熟なままで生まれ、生後に完成するのに10年かかるのです。いわば心は約10年の生理的早産と言えるのですね。心はお母さんの愛情や大人からの養育、刺激を受けて人間になっていく。この生理を誰も教えていない。科学の学問というものは一体何をしているのか、と驚いたわけです。
「精神の発達」というのは、赤ちゃんの精神をどのように発達させたらいいのか、ということですから、まずこの「心の個体発生学」を確立することがポイントだと考えた。そしてこの視点から教育学をつくり直すべきということに気づいたのです。こうした視点は洋の東西を問わずなかったわけです。これをやろうと没頭しました。それでその５０００万円がなくなった時、何かの形で残しなさいよと言われて、２００６年に「ヒトの教育の会」をつくり活動をすることにしたのです。これが、私が現在のような活動をしている理由なのです。

## 医者や科学者は人類が繁栄する方向に努力する責務がある

――そういう研究に先生が力を注ごうと思われたのは、やはり現在の日本の教育の現状を見て、ということがあったのでしょうか。

現状の教育の問題を感じていなかったわけではないですが、私の場合はそこが出発点ではなく、むしろ人類という一つの生物は一体何なのか、という疑問からが大きかったのです。「なぜ、人間は人間が育てなければ人間にならないのか」という疑問です。
ウシやトリは人間が育ててもウシやトリのままだし、たとえ餌を機械がやったとしても、ニワトリはニワトリになる。ところが人間の場合は、何らかの事情でオオカミに育てられたら、オオカミのようになったり、非人間的な環境で育てられたりすると、人間らしく成長ができないのです。「人間だけがなぜ?」――これが私が生物学者、医者としてすごく疑問を持ったところなのです。
しかし、「人間はそういうふうになっているのだ」ということを、大人が認識していないものですから、自分勝手な環境を子供に与えてしまうわけですね。
１９６０年頃に「子供は子供の好きなように学ばせろ」という「自由教育」の思想が日本に入ってきました。これは、躾や訓練というものは、大人が決めた枠に子供をはめ込んでしまうものだから、これを強制すると、子供の個性が伸びないと主張したものです。今でもこういう風潮がありますね。自由にやらせるのが教育であると。私はこれはとんでもないことである、許せないと思ったのです。
なぜ許せないかというと、そういうあり方では、子供が良くならないばかりか、まさにカレルが言ったように人類が滅びる方向に向かってしまうからです。私は医者であり科学者でありますが、医者や科学者は、人類が繁栄する方向に努力する責務がある。我々はそのことを考えなければいけないということなのです。

## 科学が裏付ける「人間の育て方」

――井口先生の「ヒトの教育の会」のテキストには、脳の仕組みについて詳しく書かれていて、10歳までの脳には理屈抜きに良い事悪い事の判断を落とし込んでいくことが必要であるといったことが解説されていますが、これについて詳しくお話しいただけますか。

「心の個体発生学」をやるのに、なぜ私が「ヒトの教育」という言葉を使ったかと言いますと、赤ちゃんは「ヒト」という生物として生まれます。つまりホモサピエンスです。先程も言ったように、この時期にもし何らかの事情でオオカミに育てられたら、人間はオオカミのように育ってしまう。ですから生後間もなくの

國學院大學 人間開発学部
初等教育学科教授
柴田保之

# 重度障害者の思いを伝えるために
# みんな言葉を持っている

しばた やすゆき
1958年 大分県生まれ。
國學院大學 人間開発学部初等教育学科教授
専門は、重度・重複障害児の教育に関する実践的研究。自作教材を介して障害の重い子供との関わり合いを続けるなかで、彼らの内的な言語の存在に気づかされ、障害児教育のあり方の根本的問い直しを続けている。
作家で特別支援学校教諭の山元加津子氏を中心とした、「誰にも思いがある。〝植物状態〟は回復できる」ことを世の中の常識にするための『白雪姫プロジェクト』に参加。
著書に『みんな言葉を持っていた ―障害の重い人たちの心の世界―』（オクムラ書店）がある。
ホームページ http://www2.kokugakuin.ac.jp/yshibata/

# 植物状態の人も、心身障害の人も すべての人に言葉がある

「閉じ込め症候群」――それは、例えば突然の病気や事故による脳障害のために〝植物状態〟となり、誰にも何も伝えられない、意識があることさえわかってもらえない状態を指す。

そんな方たちから〝言葉〟を引き出す活動をされているのが、國學院大學教授の柴田保之氏である。

「言葉も意思すらも持たない」と思われた障害者の「真実の言葉」を導き出すことから始まった活動が今、多くの障害者やその家族に大きな希望を与えている。

取材　2013年5月22日　國學院大學たまプラーザキャンパスにて

## スイッチで言葉を綴（つづ）る方法の確立

――柴田先生は当初、先天的な重症心身障害の子供たちの運動機能を引き出す研究をされていたのですね？

そうです。大学で、実践的研究という道を見せてくれた先生に出会い、その先生から、関わるならより重度の子供と付き合うことが大事だということを教えていただいたのです。その頃の世の中の常識は、重度の障害者はほとんど言葉が理解できず、声や表情、わずかな身体の動きでしか思いを伝えることができないというものでした。

つまり、重症心身障害の子供というのは完全に別世界の人間として社会から切り離されていたのですね。それを当時、健常者と同じ発達の道筋にある人間として、同じ世界に引き込もうという動きがやっと出てきたのです。つまりそれは、「同じ世界にはいるけど、立っている場所が違うだけ」という考え方でした。当時はそれはプラスの意味合いをもって語られていたのです。私自身もその考え方にすっぽりと染まっていたので、彼らの存在を尊重しながらも、やはり彼らには「言葉はないだろう」と思っていました。

しかし、「何もできない」とされている重度障害の彼らが、実はいろいろなことを感じ考えて、自分で動こうとしていることは、実際に関わるなかでよくわかっていたのです。ですから私は、人間というのは「言葉なんかなくても感じる心を持ち、これだけのことができるのだから、素晴らしい」と思って突っ走っていました。そのなかでもぽつぽつと、「この子はおそらく言葉がわかっている」と思えるお子さんは時々いたのです。そこでその子たちとのコミュニケーションの手段として、パソコン（ワープロ）を使い始めたのです。しかしその時は、単に私の仕事の中心である「彼らから自発的運動を引き出すこと」の副産物としてでした。

体のどの部分でも一部が動いてスイッチを押すことさえできれば、文字を綴ることができます。やり方は、ワープロにスイッチをつなぎ、「あかさたなスキャン」という方法で文字を選んでいきます。画面の50音表をまず横に「あかさたな」と送って行を選び、次に「か行」なら「かきくけこ」と下に送って一文字を選びます。

このワープロを使っての言葉の聞き出しは、私たちにとって新しい技術の獲得でもありました。障害はそれぞれの子供で異なるので、最初は暗中模索で苦労したのですが、その後はこういう身体的ハンディの子にはこの形のスイッチを使えばいいとか、だんだんとこちらが「身体が動かないだけ」と思っている人から、言葉を引き出せるようになっていきました。

## 「か」「あ」「さ」「ん」…覆（くつがえ）された〝これまでの常識〟

スライドスイッチを握り、言葉をつづるかんなさん
2006年9月

ところがそこに、私の研究を根底から覆すことになる当時小学校4年の八巻かんなさんが登場するわけです。彼女は生まれつきの重症心身障害で、私が関わっているなかで一番重度のお子さんでした。ですから私も彼女が言葉を理解しているとは思っていませんでした。

かんなさんは身体の動きがほとんどないため、自分でできる日常の動作は全くありませんでしたが、わずかに動く手で、好きな音楽が流れたりするスイッチを使うことができるようになっていました。そこで新しい試みとして、ワープロで「かんな」と名前を打つと、「かんな」と音声が出るという新しい教材を用意してスイッチをつないでみたのです。



彼女はワープロに興味を示し、私が補助をしながら名前を打っていきました。「かんな」の名前ができあがっても手の動きをやめようとしなかったので放っておくと、画面には「かんなはすき」という文字が並びました。しかし私は、この時はまだ彼女が言葉を理解しているとは信じることはできなかったのです。

そこで次の機会にこのことを確かめようと、彼女にまたワープロを出してみました。彼女はしっかりと画面を見据え、スイッチを動かしていきました。補助をするなかで、彼女の文字を選ぼうとする強い意志が伝わってきました。これは何か大変なことが起きているということだけはわかりました。「か」「ん」「な」の次に選ばれたのは「か」「あ」「さ」でした。もし次が「ん」だとしたら、彼女が言葉と文字を理解していることは間違いないことであり、私のこれまでの考えがすべて土台から崩れるだろうと直感しました。

彼女は「ん」を選びました。そのまま続けて並んだ文字は、

「かんな　かあさんがすき　めいわくばかり」。

彼女が言葉を綴ったこともさることながら、このような母親への感謝と愛情に満ちた深い思いを抱えていたということに、本当に驚きました。

スイッチを使い、パソコンに文字を打ち出す方法を説明する柴田氏
コミュニケーション方法の勉強会にて　2013年6月22日

――常識をひっくり返された瞬間、どのような思いだったのでしょうか。

むしろ爽快でした。これまでえらそうに論文を書き、授業でもいっぱい話をしてきましたが、それは間違いだったんだなと。これまで関わってきた人たちに申し訳なかったという思いがありました。

しかし実はそれまでも、障害の子供と付き合うなかで、そういう常識が覆されることの小さな積み重ねはあったのです。そのなかでも、かんなさんとのことは一番大きなものでした。

彼女に言葉があるということを知り、そしてわかったことは、今後出会う人に対して、「この人には言葉がある、この人にはないなどと『分ける』力は自分にはない」ということです。わからないのだから、私はやるしかないのだと。仮に言葉を引き出すことがうまくいかなくても、それはその人に言葉がないからではなく、こちらのやり方が悪いだけだと思ったのです。

そこからは、彼らとの関わり方を全部変えて、「すべての人に言葉がある」という前提で動き始めました。するとすぐに何人かの子供に言葉があることがわかったので、やはりこの方向でよいと確信し、活動を進めていきました。

しかし当時は、この事実がこんなにも受け入れてもらえないものだとは思ってもいなかったのです。

## 疑われる「障害者の言葉」

「いいこと見つけた！　みんな聞いて！」という感じで話をしても、相手の反応は「信じられない」というもので、「あれ？」と思うことが増えていきました。事実であっても「伝わらない」「信じてもらえない」ことのもどかしさをじわじわ感じ始めたのです。

しかし一方では、この活動をするなかで言葉で表現する重度障害の方が増えていきました。

――現在柴田先生は、スイッチを使う方法のほか、直接相手の手をとってそこから伝わるサインを読み取り「あかさたなスキャン」の方法で通訳をされていますね。とてもサインを読んでいるとは思えないようなスピードで、柴田先生の口から自然に言葉が出てくるので驚きました。確かに柴田先生が通訳されている姿を見たら、本人ではなくて柴田先生が話しているように受け取ると思います。あそこまでになるには、やはり段階を踏んでいるわけですね。

そうです。今でもゆっくりやる時は相手の動きを拾って一つひとつ言葉にしていきます。

今のようになるきっかけというのは、スイッチを使っている時に手を添えて一緒に動かしていると、相手が実際に手を動かす前の「ため」が伝わってきて、「あ